文章部門　成人・高校生の部

最優秀賞

ヘルプマーク

朝倉高校２年

矢山　美涼

みなさんはヘルプマークを知っていますか。ヘルプマークとは、周囲の人々からの援助や配慮を必要とする人々が持つものです。これをもつことで援助を得やすくなります。このような良点とは反対にヘルプマークには問題点もあります。ニュースで見かけたお話や実際に難病を抱えている母のお話からヘルプマークについての私自身の意見を述べたいと思います。

先程も述べましたがまずは、ヘルプマークはどのような人がもらえるのかについてです。具体的な例を挙げると、義足や人口関節を使用している方、内部障害や難病の方、妊娠初期の方々です。しかしながら、身体機能等に特に基準を設けているわけではなく、配布を希望する方々は基本的にもらうことができます。ここでの問題点は配布の希望をしにくいという点があります。この話はニュースでも見たことがありましたしこの作文を書く際に母にもお話を聞きました。配布の希望をしにくいというのも制度の問題ではなく、自分が障害者であることや病気を患っていることを周囲に知られてしまうことに抵抗があるからだそうです。母が言うには、見た目が健常者であるがために周囲の人におおげさなどと思われることが嫌なのだそうです。そう言われてみると何も患っていない側の私の目には、何もないように見えるのになぜヘルプマークをつけているのだろうという思いが映ってしまうと思います。さらにこの感情は無意識であり、悪意など全くありません。しかし、ヘルプマークをもっている方々からすればその様な他人の無意

識な思いすら過剰に受け取ってしまい、心苦しくなるのです。そのため母は未だにヘルプマークを申請してはいません。しかしながら病の症状などは突発的に発生するものであり、公共の場でそのような状態になってしまったとき、周囲の人々は驚いてしまい適切な処置を行うことができない可能性があります。そうなってしまわないようにするためにもやはりヘルプマークを身に付けることは重要なことです。そう言い切れるのもヘルプマークの裏面には緊急時に必要な内容、例えば連絡先や必要な支援などを書いたシールを必要に応じて貼ることができ、急な病変などでコミュニケーションをとることが難しくなった場合に、どのように支援してほしいかも周囲の方々に知らせることができるからです。これらよりヘルプマークをつけることは当事者を守るために大切なことであると考えました。

これまでの話の中で浮き彫りになってきたヘルプマークの問題点と改善方法について考えます。問題点は二つあり、一つ目は当事者がヘルプマークを身につけないことがあるという点です。ヘルプマークを身に付けることは恥ずかしいことでも何でもありません。寧ろ周囲の人々に確実に伝える必要があると思います。誰でも自分の中で善しとしとらえることができないものを大きな声で、しかも他人に自己主張することはかなり勇気が必要です。しかし、この場合には勇気ある自己主張こそが自分の身を守るためにも必要です。そこで私は当事者が自己主張しにくい社会の環境こそが問題であると考えました。今の日本社会は昔に比べ少しずつ他人に無関心で冷たくなってきている気がします。公共の場で出会うハプニングにどれほどの人がすんなりと手を差し伸べることができるでしょうか。この問題からも周囲が無関心であるからこそヘルプマークを身に付けても冷たい視線があびせられてしまうという意識がうまれるのかもしれません。手っ取り早くこの状況を打破するには社会全体にヘルプマークについて正しい知識を身に付けてもらうことが一番であると思い

ます。私もこの作文を書くまではほぼ無知の状態でした。しかし、知ることで大きく意識が変化し無関心であることは良くない事だと気付かされました。私が変わったように社会全体で受け入れ体制を築けたのであれば、当事者もヘルプマークを付けやすくなり、周囲の人々も気付くことができます。そして自分がヘルプマークを持つことになっても不安を持つことは無いでしょう。

私が見たニュースでもほんの少しの時間しか取り上げられておらず、周知してもらうには不十分のように感じます。はやいうちから教育の一つとして学び、思いやりの心を育みこれからの社会をより良いものにしていくことは、必要なことであると思います。そして私はこれらを自分の成長のための一つの学びとし、何かハプニングが起こってしまってもすんなりと手を差し伸べることのできる思いやりのある人になりたいと思います。

文章部門　成人・高校生の部

入選

人の心を変える勇気

朝倉高校２年
田中　はな

ゴールデンウイークも終盤に差し掛かったある日、暇を持て余して映画配信サービスを漁っていた私はある映画のサムネイルに目が留まった。ターコイズブルーの車に運転手らしき白人の男性、後部座席には黒人の男性が乗っている。映画のタイトルは「グリーンブック。」私は、「この二人がなにか旅をする物語だろう」と朗らかな想像をしてこの映画を見始めた。しかし、私の予想とは裏腹にこの映画は一九六〇年代という黒人に対する差別がまだ色濃く残っている時代のアメリカでの人種差別をテーマにした映画だった。そして私は、差別の恐ろしさや、おかしさを改めて知ることとなった。

主人公のイタリア系アメリカ人のトニーは黒人ピアニストであるシャーリーがアメリカ南部で行う演奏ツアーに運転手として雇われる。二人は、黒人が利用できる施設を記した旅行ガイドブック「グリーンブック」を手に黒人差別が根強く残る南部へ二ヶ月間のツアーに出るのだが、「黒人ピアニスト」、シャーリーをめぐるアメリカの現実は、トニーが想像していたよりも遥かに過酷で無情なものだった。

まず、映画のタイトルにもあり、劇中でも何度か登場する「グリーンブック」。当時のアメリカ南部の多くの州では「ジム・クロウ法」と呼ばれる、黒人が一般公共施設を利用することを禁止制限した法律が存在していた。公然と黒人の利用を拒否する南

部の宿泊施設やレストラン。黒人の旅行者たちがそれらの施設を利用した際のトラブルを避けるため、出版されたのがこの「グリーンブック」だった。私は「グリーンブック」や「ジム・クロウ法」というものがあったことをこの映画を通して初めて知り、人種差別という非人道的な行為が法律の上で当り前のように行われていたことに驚いた。

また、劇中にこんなシーンがあった。ツアー中に招待されたある会場の併設されたレストランで、シャーリーは天才ピアニストとして招待され、まさにVIPであるにもかかわらず、「黒人だから」という理由で食事を断られてしまう。他にも、別の会場では、シャーリーがトイレに行こうとすると

「あなたのトイレはあちらです。」

と、庭の片隅にある掘っ立て小屋のようなトイレに案内されていた。つまり、シャーリーを天才ピアニストと称する彼らは彼の才能をほめたたえながらもシャーリーがステージを降りた途端、黒人という差別の対象として扱うのだ。そして、彼らは悪びれることもなくロを揃えてこう言うのだった。

「この土地のしきたりだから。」

と。

実際、運転手であるトニーも最初はシャーリーに対して黒人を差別した言動を度々していた。ここで肝心なのが、差別をする側は「差別をしている意識」が一切ないということだ。まわりの環境や習慣を理由に考えることを放棄した人は信じられないことを平気でする。だからこそ、私たちは差別をしないように意識しているとしても気づかない内に差別をしてしまっていないか改めて気をつけていかなければならない。

そして、大切なのは「人の心を変える勇気」だと思う。度々、差別的な言動をしていたトニーにシャーリーは一度、激しく反発した。そこからトニーは「差別は当たり前ではない」と考えが変わっていった。シャーリーがなぜ、

わざわざ黒人差別の根強い南部でツアーを行ったのか。ツアーのスタッフはこんなことを言っていた。

「天才であるだけでは足りない。勇気が人の心を変えるのです。」

果たしてシャーリーのその勇気によって南部の人々の心を変えられたのかは分からない。しかし、トニーの心は確かに変わっていったのである。

最近、テレビで人種差別に関するニュースを目にすることがある。例えば、テニスの大坂なおみ選手は、全米オープンで試合のたびに異なる名前が記されたマスクを着けて登場していた。マスクに書かれているのは、アメリカで警察の人種差別的な暴力の被害に遭った黒人犠牲者たちの名前であった。この大坂選手の勇気と行動は多くの人々の心を動かしたことだろう。

ここでは、黒人差別について取り上げたが、差別はどんな時代にもどんな地域にも、その時その時で存在する。「肌の色」と聞いて想像する色は人それぞれだし、セクシュアリティの問題など、人のある一部分を見て判断され、生きづらいと思うこともあるかもしれないがその状況から救ってくれるのは紛れもなく人の力である。だから私は声を大にして訴える。

「勇気が人の心を変えるのです！」

文章部門　成人・高校生の部

入選

「些細なこと」が、人を救う

朝倉高校２年

馬場　ゆきの

ＬＧＢＴＱという言葉を、一度は耳にしたことがあるだろう。これは、性的少数者を指す総称である。今回は、このことについて私の意見を述べていこうと思う。

現在学生である者や、大人でも学生時代、一度は校則に不満を持つだろう。常々、私は学校の校則の一部に疑問を持っていた。もちろん、校則があること自体に不満があるわけではないし、納得もしている。しかし、どうしても納得できない校則は誰しもあるものだ。私にとってのそれは、制服と髪型だった。私の言う「疑問」は、着崩しや、髪を染めることを禁ずるという部分に重きを置いているわけではない。制服を男女で完全に二分すると言う点や、男子の頭髪の長さを制限すると言う点に、不満を持っているのだ。何故、男子はズボンを穿き、女子はスカートを穿くと決められねばならないのだろうか。何故、男子は髪を伸ばしてはならないのか。私はここに、人権との絡みを見出した。この校則は、身体的な性別で強引に分けており、そこに心的な性別は介入していない。当然、制服をズボンとスカートのどちらを穿くか自由に選べる学校があるということは認識している。が、未だ選べない学校があるということもまた事実である。そして私は男子の頭髪に関して、伸ばしてよいと全

面的に認める学校を耳にしたことがない。これらの校則は、LGBTQを謳う今、考え方を改め、変化していくべきなのだ。日本人の十三人に一人つまり日本国内だけでも九百万人はLGBTQに心を悩ませている。それほどまでに多くの、自身の性に悩んでいる人がいるにもかかわらず、私たちはそれに気づけない。それは、彼らがそのことを隠しているからだ。そして、その悩みを隠さなければいけない環境を私たちが作り出していると捉えることもできる。これは重大な問題である。それと同時に、その環境を整えれば、より生きやすい社会の形成が可能であると証明できるものである。

人の考えを変えるには時間を要するが、一度変わりさえすれば持続性は期待できる。今こそ、心身の性別への理解を深め、誰もが生きやすい世の中へと変化するべき時が来たのだ。どうか、自分の周りに性別に悩む人を見つけたら、なんの偏見も持たず、ただ、相手の話を聞いてほしい。きっとたったそれだけの、あなたにとっての「些細なこと」が、人を救う。

文章部門　成人・高校生の部

入選

ウクライナの紛争激化からひもとく教育と人権

朝倉高校２年
井上　陽菜

ウクライナに対するロシアの軍事攻撃が始まって、早くも一年と四か月が経過した。これほど長い年月が経っているにも関わらず、テレビニュースでは、このトピックについて常に報じ続けている。同時に、建物や人的被害の他に、様々な問題が浮き彫りになってきているのも、ここ数か月のことだ。その中で、特に私たちと関連深く、人権に関わる問題は、建物や人的被害による、ウクライナ人学生における学習の機会の損失である。そして世界中の学生との不平等を導きかねない。私は、ウクライナのこの現状と、人権とを結びつけ、考えを深めていった。

今、私達が普通に生活をしているあいだにもウクライナ現地では、たくさんの命が奪われ、平和が奪われ、そして、学習の機会が奪われている。現在、ウクライナでは、実に、約五百万もの子どもたちの学習の機会が失われている。そもそもなぜこのようなことが起こるのか。その要因としては、主に二つのことが考えられる。一つ目は、人口密集地での爆発性兵器の使用による施設の破壊だ。先程も書いたとおり、ウクライナでは多くの建物の被害が発生している。その被害にあった建物の中には、当然、学校も含まれているのだ。学校を失ったことによって、子どもたちは、本来学習をするためであった場所を失う。それと同時に、学習をするた

めの機会も失っていたのだ。二つ目は、子どもの安全を守るために、その両親たちが、彼らの子どもが学校に行くのを止めることだ。少しの間でも親と離れた場所にいるのは危ない、子どもの安全が第一な親は、みなそう考える。それによって、学校に行きたくても行けない子どもが出てくる。つまり、学習の機会を失うのだ。

子ども時代の、学習の機会を失うこと、それは、人生の損失になりうる。基礎知識を構築する子ども時代の学習環境は、その人自身の、一生を左右する大きな要素なのだ。戦争という優先事項が終わったあとに学習をしてももう遅い。世代全体が危険にさらされることになるのだ。

オンライン授業など、ウクライナでも学習体制が整ってきてはいるが、まだ満足できる状態とはいえないし、日本の環境とは大きく違っている。ウクライナの子どもたちの人権、そして世界全体の人権を守るためにも、いちはやく画期的な手を打つことが、求められている。